門脇氏

村田

霜夜星序

余羅寒疾屏居讀書夜已初更門有剥啄聲家僮起而應之則友人種彦子也乃謂余曰吾為一大事因縁来余驚而徐問其故種彦子曰霜夜星一編既成剞劂告竣將以布世但所少者足下序文而已盍以速成諸余因思數月前已有其約以塵事紛々如猟集加旃衣食于奔走未暇搆思也就架上撿之種彦子所贈草稿尚焉取而朗誦一遍乃言曰天道恢々疎而不漏

積善有慶積悪有殃此古人真實語也夫伊兵衛花児相見于路傍也名士佳人才貌匹敵目挑心許両意已融液矣若是時而婚焉則琴瑟好調鳳凰和鳴何不善之有唯其流離落魄伶仃孤苦各々東西萍断音絶一則踪跡不定嚢空罄纔頼澤児以餬口一則被棄棍徒落乎花街終向快保帳下為羔酒児可見二人之縁於是乎休焉既而紙窓故紙認花児筆移居芝濵鑽穴竊玉百般不善自是兆則安知不好因

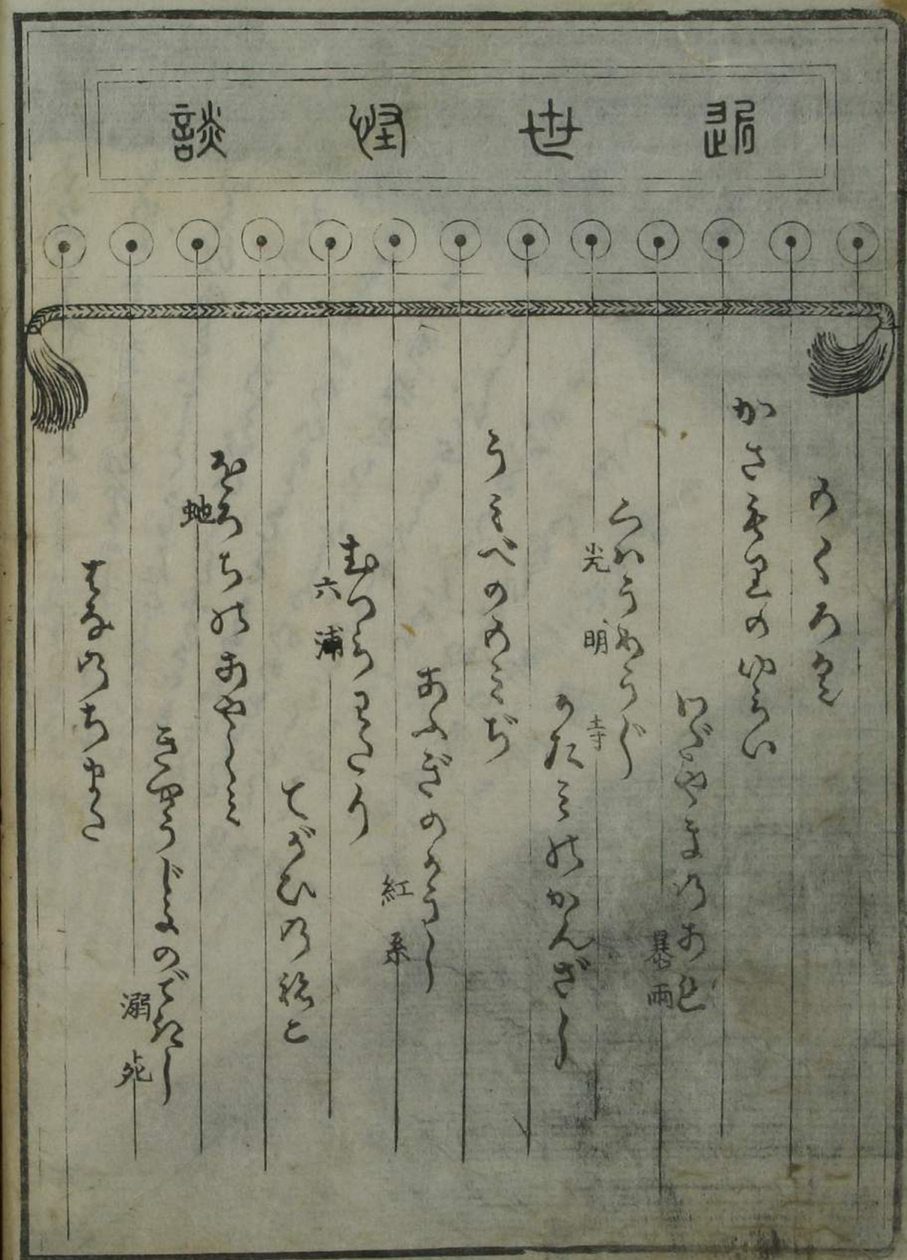
縁即悪因縁乎此擧也使伊兵衛棄糟糠之妻花児鼻負于恩人二人為人之輕佻可以知耳媿婦寛媿為祟父子立地下世不亦宜乎求次郎於津嶋則不然也少年情痴事遊冶桃花流水各々有情更無驚蝶負心之行其殺于宮太夫則寘々有數耳凡物過濃則帰淡過淡則為濃此理之常無足怪者也花児津嶋之為尼清復爾爾彼則思従前積悪漸々来報愛着姦心一時消盡矣擲玉簪而代念珠棄紅裙以着緇

衣積年之悪為識悔滅矣此則情人死賊事起
非常頓思人世夢幻茫々無定遂奉佛行脚此
二尼所異也夫水滸小説中第一書也請舉其
二以論之打虎一也武行者以智黒旋風以力
殺婦人一也宋公明出於不得已武行者直情
鋭往在於報仇耳此其所以稱妙筆也今種彦
子之作此編才子佳人其事稍同而其意則異
矣毋乃効顰水滸乎種彦子莞爾而笑曰然自
是燈下劇談不覺移時僮僕輩在傍者昏々然

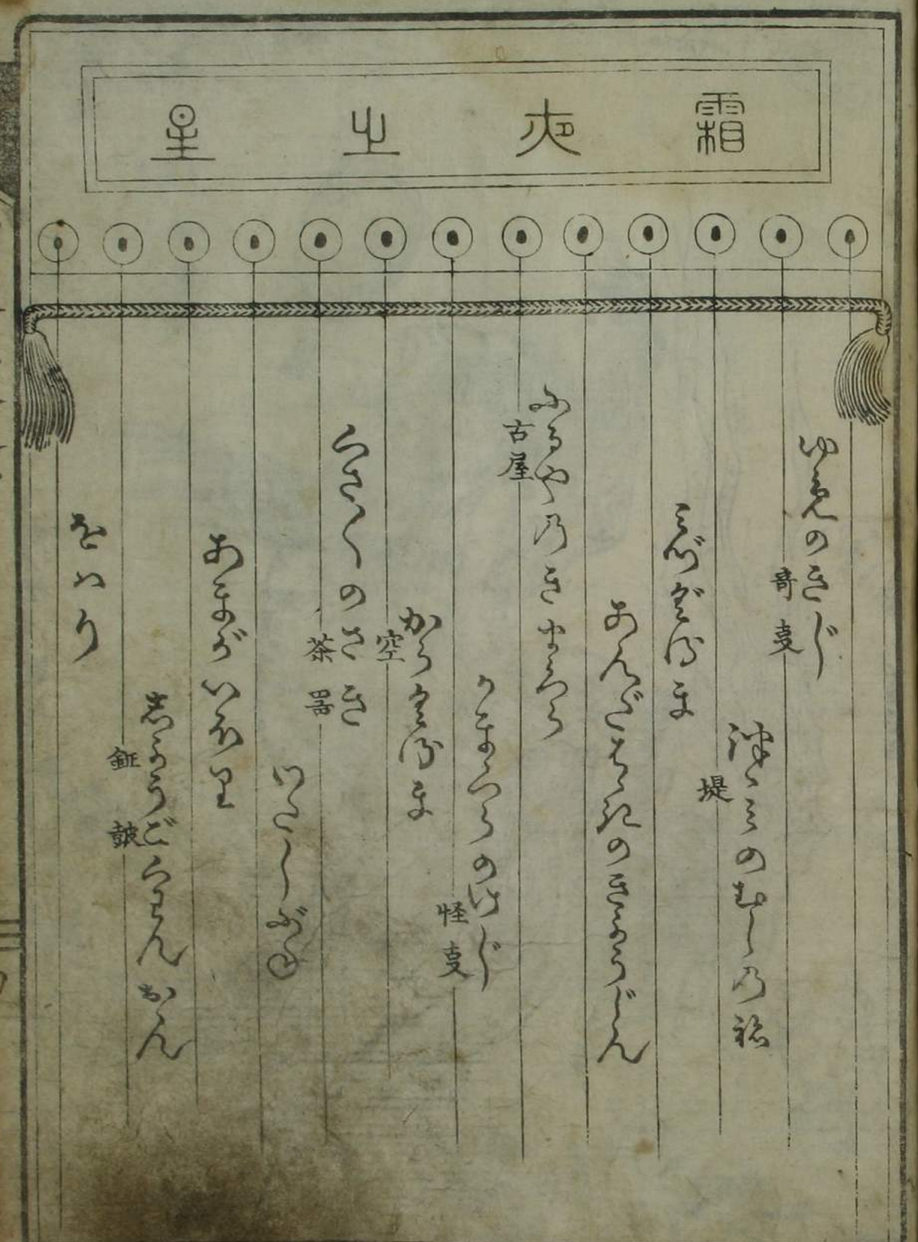
睡種彦子曰今日之會談論如湧可謂愉快也
唯恨序文不成耳余曰此編機軸既妙矣何待
余文而輕重惟足下與余交情最密而更無一
言以弁卷端則後世其謂之何遂録前言以為
之序
文化丁卯歳孟冬朔日
江戸柏菴王承摸

神奈川人 識

諸世間談



霜夜星



侍女歌次

側女於花

高西伊兵清

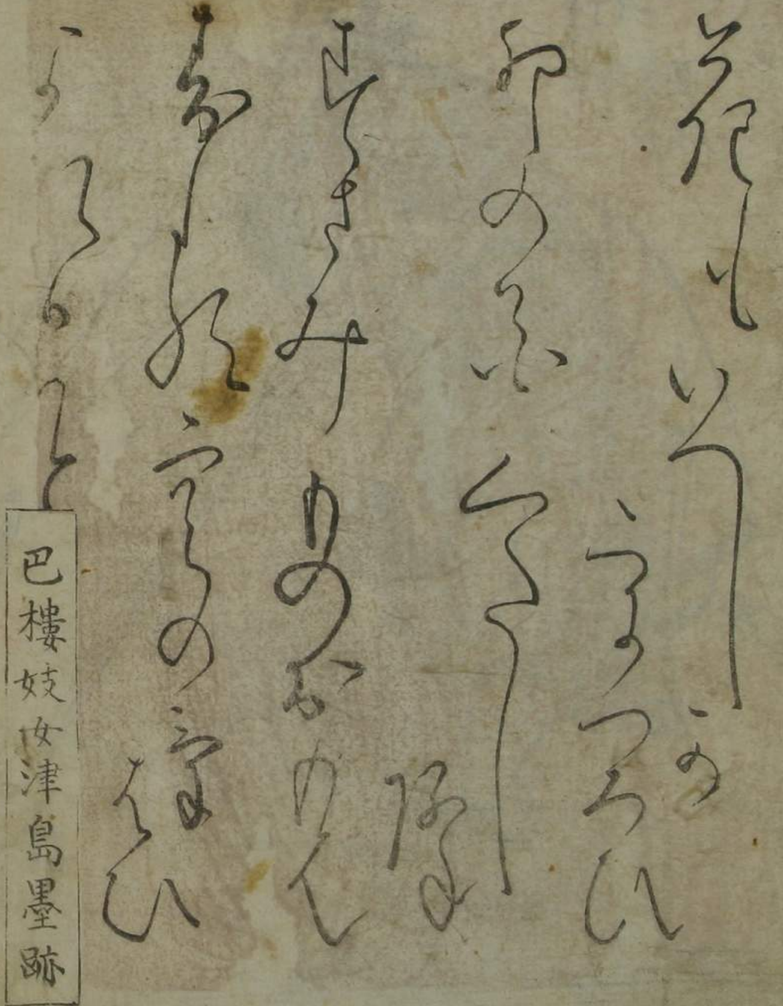
於澤寛鬼

花方求次郎

卯月官太夫

津嶋尼

修行者
圓順



巴楼妓女津島墨跡

池青

近世怪談霜夜星一巻

東都　種彦著

機語上

笠うりの由来
和田山のあと

日は暮る雨いとる野の神ねれてくるる旅路ふるむらさめりと。法詠寺と
ゐ。鉦うちゐしてゐたいしき。上總國笠森觀世音菩薩へむかし當國稲井
といふ所ゐ。蜜をあれるゐ農夫ゐ。それが頭を波ゐとうび見いとく紀りハ
飯ろさゐ月をいてぐれ。ろろう遠き素面加の海へ出て。ろろうさゐやハ
実しく生親男ゐつへーぐ。一日ろいぐ此山を通ふ。觀音の堂傍ゐ
体ゐそぐをゐぐれ。己がろろう笠を御仏ゐあらセゐ。ろしもし
のそぐろゐ苗ひて居ろゐ。不思義や光明赫奕ろ。俄ろ天刃へ

さらさらおのびをめゆきさらさらん
ひんやりさをときをなのらそをれいまの
うさのうきめうめう

もかうざうしうぶやんごろうれ所方此さをとれるへやて波木をとろうあげ
とるゝ。翁のうちとも家冨さんゝろう。笠森觀世音菩薩と名づけ奉り
そうるとをみて縁起を物語。今日角帳のたゝりあうとて。諸人蟻の蜜ふあつ
うぶでゝ。そも此御堂とゝふい四方塔ごろの舞臺ふて。總南ふ名ゝれ精舍
ゝ。蘭窓ふ彫る巧雲さまう。繍柱ふらぶゝる玉龍めぐる。玉をちりん金を鎖ら
さらふ結猜ひつゝもべうゝ。頃ハ三月中の八日。心念不空の風あゝうふ枯瓜ら
葩ひゝれ。利益ふうてハ天ふ唱雷とゝふのもおそれ。実ゝれ枇杷もうゝぶく
心信肝ふ銘ぜるのもゝ。往来ちぶゝくもとぶんゝ。棒をうゝひかをぬれて
うゝうを賣あう。或ハ刀玉ふ鐵鐶くみと銭をうゝもあう。此所ふ土人ふとお
まぶう。見物ゝれ一個の武士あう。彼ハ元房州海上山の山足芳見里とゝふの
産ふて。いとかさゝれうう却ゝるのゝ。ある御館ふ仕へてあうるゝ。往年芳見の里

る。父丈治兵おとゝふ者病ありうと告こせしうぶ。主人ふいうをわゝひ仕を辞
して故郷ふかゝう。実ふ看病ふのセど。定ゝとる命ふやあうゝめ。又文治ら郎ふ
き人の數ふいうゝれば。悲歎言葉ふ演ゝゝ。わどもゝゝ忌どもゝゝのう伊玉郷
ふふおのゝいゝう山家ふ住居して。携夫漁翁ふともゝひゝゝゝ月日を送ら
ゝい。人ゝう者の本云ふあゝぞ。さゝゝび他國ふうう。家の佳名をひれおとさんと
連路ゝれば此觀音へ詣でゝうう。彼ハ年いまゝ二十ふ左ぞ口ふ鶏舌をゝく
ゝ。ふふ蘭とふゝゝぞゝて。鄙ふ似ゝる風流士。日もすゝ西ふうもつゝ
雀ねゝゝをいゝゝ頃ゝれぶゝやいとも旅宿ふうゝんと。夕陽まゝゆく肩の
さんぞうつゝむふを見れば二人づゝれる女里人とゝ見えゝ。ゝとうゝあうゝ
ふゝて。一人ハ年三十をもゝへゝんとゝ。業平の歌のさゝあうゝねど。ちふゝゝ花
ゝ白ひのうゝていとうゝん。今一人の年二八ばうゝあうゝ。とふ秀麗ふゝて。白ハ

暮ゆく春をおしむ桃花のよそほひ。腰は百すぢの糸をつらねしにもまさりて柳の眉。けうらなる髪のかゝり。にほひあるつらつき。絵にうつさばうつしえじ。筆にかくともおよびがたかりし。伊兵衛袖うちあはせて斜にみやり。邂逅に人と生れし身のかゝる美人を妻となしてこそ世にすむかひもあるらめと。心のうちにおもひめぐらし人となるに降とも知らぬ春雨のしめやかに身にかゝれば。やゝしばしたゝずみさゝ。花のかたへなる茶亭に憩ひてあれなるを見れば。彼女二人も同じ床机に腰かけけぬ。あれなる煙草をひき出さる媒となるなり。伊兵衛茶など飲みをはり。烟管をとりさぐりのの、となりしいひ出だせる。女中さんは無礼なれど。いづれよりいづれへはまゐらせますと。若や恋の手づるにもなりなんと馴々しく向ひければ。姉とおぼしきが答へて。されば我々は近辺の者にて候ひしが。不幸にして良人におくれ。親をさへなくせし。叔父なる者当国千種の浦に住むはし。

あれとさのみめづらしからねど。是にも尋ねあれど。汝をしたふ近辺なる草とり仁王とて。往古孝女の心願にて。一夜に三反の草をとりおさめしとかや。土人の口碑に語り伝ふ郷村に。是なる花子と中妹と只二人膝をつるべれぞかりの庵に世をおくれなく、かくり待ふと。伊兵衛が体面よろしくあればこそふるひしけん。細々とおのぞれば伊兵衛もおろそかならず。何と中す縁由はあり待らねど。便なき身の悦しき束なく、おぼそらん。さて花子と申すは。端正にして顔色麗しく。楊家が深窓を出し玉環はあらねど。月もねたく花もおそるゝ粧ひなるに。何として嘉婿にてもとらずなどやといへば。花子も顔さとあかめ。とかく両親におくれてよりは洋々舟の今はからん心中もなく侍ると。自然と眼中に情をふくむ。伊兵衛をさへれ此方も心とられめけど。姉のてれんなるひかる言葉もなかり。とやせましかくやと思ふうち。むしろかの山のぞれ男洋くとうてあわく来り。やがて顔に

ぐ〳〵暖帽をとゝとうさつゝみるに。つくくと彼女をもうつていろく。けれ近郷のくに
たのそ。それなる女子を所望るもど。返簡うれいけれをあるどるをや。〳〵服いや
しけもど。左ぐひ織方ふもあるぞ。今日は是非ふ有無の返答ゆんと。恵ふ和して
やろうと。蘭菊のもとふ猪熊のくるへるぞ〳〵もるれば。伊古彦側ふ旅ね
仙中ふいろう。彼男ふ對ていひるに。けとへてあひ素〳〵もるとるれば。何うとこ
けは知ゝ侍らはねど。人ぐち繁に中るれば。そねてのそふ去のうくんや。一り孫な没く
縁とゆう。さーもぐしらるとふはあれど〳〵言和れば。彼男大さふ怒り。是奴何等
の者ぞれば。兩度口ぐーを為者るる。姑娘おーぐうておいもるゝ。此男を増るし
ふふおや。う〳〵向後のえもーめくと。かのぐまれる板芒難ふて。伊兵衛ぐ真向
そくとおてうれば。伊兵衛ひうをとゝ。ものふをとゝ〳〵冷笑ていふ。れ今
か〳〵落魄るもど。大ふをもくぐさむ者く。汝でんふゆんうるべんうとて。髻掴ん

でひんかこもべのけさふ撞と倒れ。大地ふて頭をもくうふうるへべやる
ひりん。此為久〳〵ふえ〳〵。汝ふ去るしかけと。口のうちふてつぶれ。逃るもも
しかうえ。伊兵衛ハ蔓うちてもひ。無益ふ罪つくうう。やくさよ女もうるかる
所ふかう。てハ。彼悪提又寿んもちうるとしいざ〳〵。的うねといふふ。女い悦び
いくふを姉妹ぞうとあるどう。此妹を恋慕へどかとうむくつけれ外境客な
くぐふふ深いく。君のかりてとゆえるうもそうと一礼の後。黄昏る
をべ別を告て。拾花のうそ立出れハ。残多くいふへども。後ぐべうう。異意
あとふつんえへぐれふ宿所をもくてのち。いひうる使もあんとう逆ぐさぐう
茶やの床机を立出れば。花子が扇ふ側ふのうつやばとしのみ
るくんと。何ふうく。彼をえれば。元来花子も一目えるうう。伊兵衛も風流う。
ふふあれば。ぐと是をもくもんと。懐中ふのうし江戸ふて。扇の風ふ吹もつへ

こいつゝ
どつこい
よいやさの
いつゝへらさりのふ
てう中てゆくゑあふ
ひあかれものゝらん
ぶりをらすところ
ゐらげん
二十三夜
ゐを中
あいたゝ
しまつた

よと。さまざまと心のうちを書つけあつるれば。伊兵衛愕然と打ながめられて
い花子もいれみちうあつやと。神魂体をうばれ。是とも心あるぬる地しつ。
いくあとを慕ひゆくふ。ゆれ空漠ちとつめく声の哀ゆるふぞ。若や先の
同子の悪根をうらひ赤んも知るべくるぞ。とまんうれ逢てつをむづつ
と。とある小路へひんをづし。遂ふ一所の寡ふ隠り。彼女を見しるうつろ。絶
かうくまで已が旅宿をのもし。田尾といつる所ふ入へり。明の日彼姉妹が宿
所をうづしーえんと寝んとまるふ。ふるい花子がもりぐ瞳の中ふ入りて。ちべー
の写もちれやぐ。うぐさむうさのやと床のさもしーろ立生て。緑先の障子をし
ひくくと。さや居待の月のかげうくと南がわぐふめぐり来つ。前へ踏ふひうて
門をし。行人征馬簾のもとふ入うると。長夜ながいくしもかるやうふ。谷川の
響る音幽ふしてつぐとうるれ庭のふぐうつ。ちべて耳ふふれ。目ふさへぐうの。

うる涙をかとと嫌といかううう。偶側を見れば。本瓜の花の花捧あり。伊兵衛
い元素花もちぶ道を好しゆえ。ちいうれ幾ばくと。ちづ庭ふちううち。花の下
枝をかううるふ。石ふつちづれ砂ふて足をけがしれば。清めんと手るふ石盤ふ水
ち。此旅店の前面ふ。流うう清水といつる流あつて。園流ふ霜剣をぬれてるセ
ーぐくと見えれば。ちと幸と先ふ立寄ふ嗽ふ清ふしてあやうあう。南湯縣
の菊水もれふいちぐじとふ嗽ふ石思義や。ちぐめふうて血鮮く。口
中ふうちうね眉をひきあてふ
立田川のうちぐうる神ちひの三宮の山ふ時雨ふううじ
その古歌とうをかれれど。此水上ふ立ちめてあん。鉄をうつて門を造う悪鬼
ふをうつてれを矣ふいうる珠袁ふん。異竟さぐし見ん山ちうじと。
独言して。水ふさひ半町ぐうつうしふ。枯柴ふふうひやうくと踏分ぐ

猟鬼のあとある程あり。流れをくらし舟橋の縄をとゞめて渡りつゝ
をゆくに。和田山と云一りの高山あり。春ふもあるぬ地にて雲霧かひのぐ
泉天外うつくしき。姫松奇柏枝をまじへ。ちゞんがめとゆ月もあらぬ冷
あつと衣襟の中ゆゝ。芳潤なる九わと辛にて攀登れば一宇の辻堂とお
じんのあり。青苔梁をつゝ。樣の夜半あつて半ば供物も峯のあしゆゆ
ち。金羽と降雨ゆうるほし。暁の霜玉とうれて蓮坐のうそはひをそへ鬼や
ぶれて青石絶の香をうん。瓶かうて服常住の燈をかゞ。その物のそどれをい
つんうさなし。あやしむべし草堂のうちゆ女の叫ぶ声あつ。さてうちと祈ふつ
て入るゆ一人の女ゆ来たをとり堂の柱ゆいまーめゆん。今一人ハ大男上へまとゞ
ま。黒髪をたのゆゆゆゆ。右のゆめゆて病もくぶりよと。心情をさーつゆん
ちゝして此鮮血谷川（うぐれしん。ちん山賊のゞさじと。腕かねくゆもえやば

その二
あいたゝゝこれいな
かんりんゝ
さゝあこい
おのれはいかなる
まいだゝし
まるものなるぞ
そたらるゝ
おれがかゝ
りくいやるな
かたつぢ
みなごろ

いひよりへ　ろまひ
さてさてひこざやま
ふもんせうあす
うりづるをさきりて
かるあらる

手てうれば。ぱらうと刀抜んとせしが。むるりとつくさーとそし。鎗あるうて[illegible]
板をつくめたーゆ。そのまーゆて捨かれた。仏前はあらし紫釘の花瓶みてうれば。水さと流れてる貝の白へうちとひとーく。あと叫ぶ声の夢やるゆ切
とべ。ゆりとうるひて黒くうる仏をまこ二ゆ切さげうう。彼山賊うるれどとや
そひうん。口ゆ含し短笛吹ううせ。その岩蟇うこの樹梯うう。づれも喰
唱ゆ面をつくーく草賊ゆうを十余人。るてゆ俯ゆわれつとおてうれば母
兵弟いうるうこうゆまうねど。只顧彼女をうそけんと。ゆをそそ切むを
ぶゆ。相手ゆ勇勢をゆ山路ゆらーしゆ輩うれば。谷をこねえ岩をつくし。透を
うんとつうねうんど。伊兵弟い名を汐し中條兵庫之助ゆ流をうう。仇谷利
流の奥義をうらめ。眼光三乱。微塵割。秘術をつくしをそやそゆ働うう。と
れさん十分の危急うるゆ。雪上ゆ雨をううとやん。不思義やゆ鳴動。

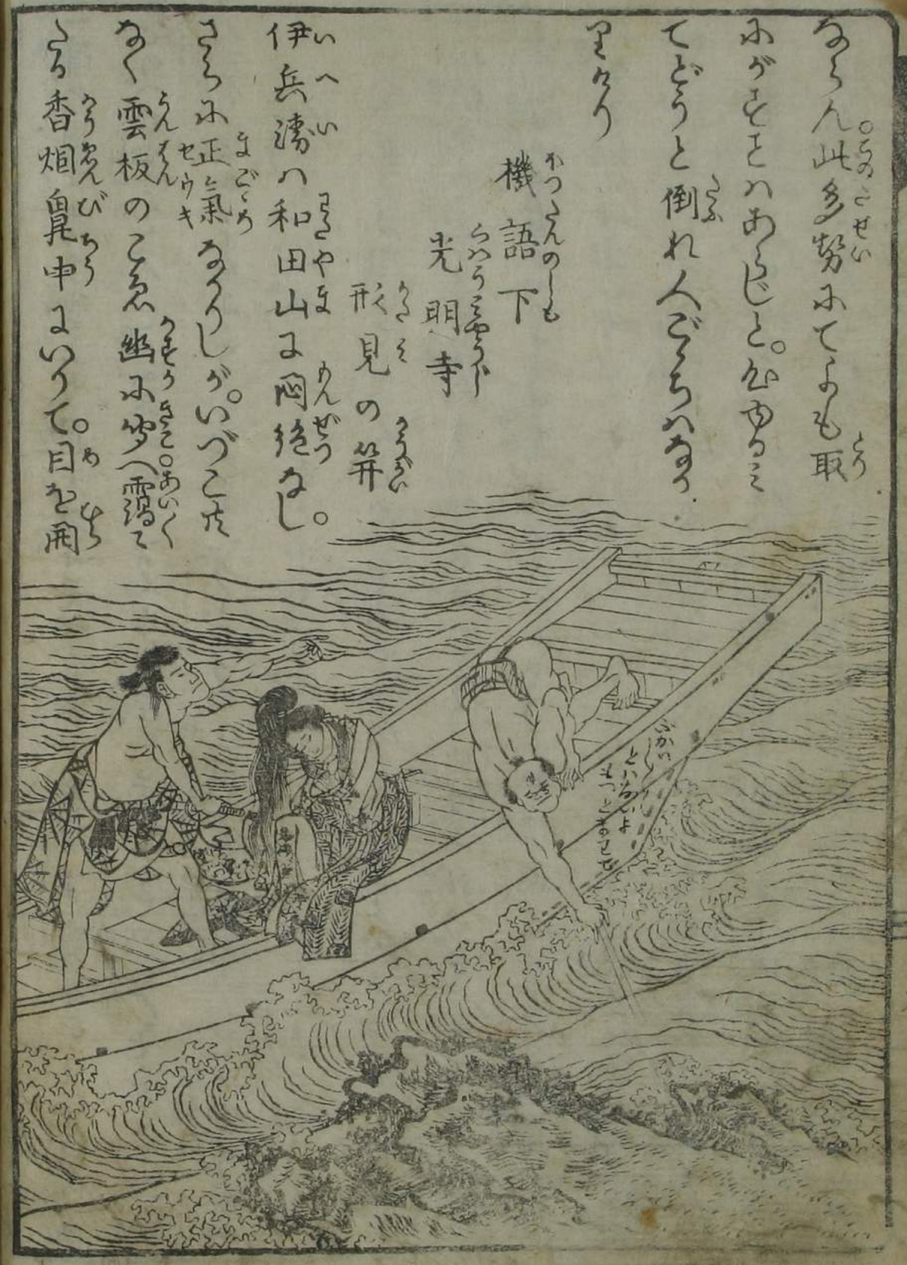
一陣の風吹来う。雪上り月光俄ゆえへぞ。漸く晦冥黒霧邪ゆゆ。
をのべて掌をえぞ。妄みいてうんも崖をあうつぞ。只声をうゆ切。
只音をきうぞゆうかえのうんうてうのゆ賊ども九うけし女児をひれ
うて。ゆ豆の方へ逃んとを。あとをわげ追らるゆ。やもゆ賊い舟持へ
をれば。あとゆいて急んとせしゆ。あやうて約綱をおうう。舟い水ゆ
ぶひ汐弟もうぞ流れうう。伊兵弟ひとう門端ゆ。あとのてもうう遣い
しく。堂のうちへいうてる貝をひれおこせゆ。すや俳諧しとえへゆい厳ゆ
氷をまゆうゆぞ。てつとおゆひて走う出。草賊はゆくる高うんうう。
對ゆ相手もうく。此時風あうく斜ゆ降雨面をうち。時るうゆ雷えゆ
く鳴岳。山足の方をゆえれば。音信ゆ崖ゆ響。御美ゆ他天蓋ゆ富士塚
のうう。火把うりうれあうの農人ううとゆ。ぱらそへ彼ゆ賊の追ゆ

なるゝ人此多勢ふてるも取
ふがをとゝあゝじと。ぶゆゝこ
てどうと倒れ人ごちへす。
ゞゝ

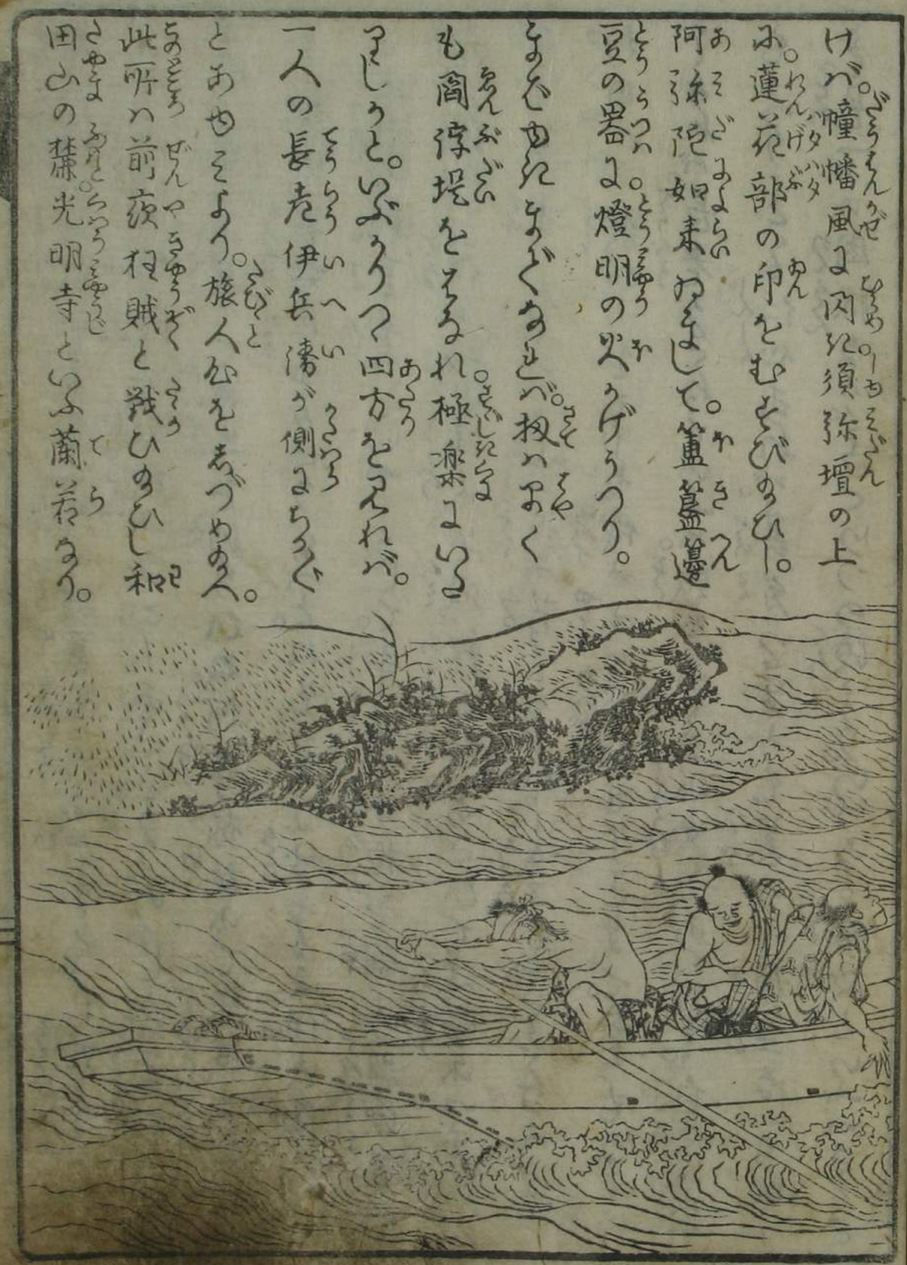
機語下
光明寺

形見の弁

伊兵衛ハ和田山ゴ岡絶なし。
さゝふ正乱なるゝしが。いづこた
なく雲板のこゑ幽ふ少(霧)て
ゝる香烟鼻中ゴいゝて。目を開



けば。幢幡風ゴ内比須弥壇の上
ふ。蓮花部の印をむをびのひ。
阿弥陀如来ゴなして。簠簋籩
豆の器ゴ。燈明の光うげゝゝ。
ゞゝゞゝゞゝゞゝゞゝゞゝゞゝ。
も間俵堤をゝるれ極楽ゴいる
ゞしゝと。いぶゝゝつ四方をゝれば。
一人の長老伊兵衛ゞ側ゴゝゝぐ
とあゝをゝゝ。旅人ゴをゞゝゝ。
此所ハ前疫神賊と戦ひゝし和
田ゴの禁光明寺といふ蘭若ゝ。



旅人遂に得勝るふりして。所の村長衆を呼ぶ。
と。客を彼川しが。公弱ふをうあくまうあしうべ業をあくと
ゆうらせーふ果して再生をはのひね。何等様故ふて。盗賊と戦ふて
ゐひーや。其始末をくくうまへと。ねもころふ物やるよ。伊兵衛
て正直つた。言葉といやうして。寺僧の仏抱を謝し。前夜旅店
庭さんふて。花とりの清水を汲。鮮血をまくひて辻堂ふいろ。いづ
こつくる者うまくねと。盗賊ふ若しめられ。女子をくくけんとは
和田山ふ戦ひーをくどう。俄ふ山の物動せーをくど。おらもるく俗
やくれば。長老くくねていふ。賊をあくを小女をあられる。自己の命
もうつくぐる仁心あれば。其男いさくくも差るく。蘇生ひしあひー
と。是一つの因縁なり。くくいつの頃くくる。故といふいさとさ

れど。此和田山ふ乱やたの又。羊頭の矢の根。此二品をくづさんし者
みぶうふ登ることをやるさど。若押て山登るせば。大両ぐう。或い天戦大
地ふおちて。お殺さくくもあり。又ハ足づうの木の枝頭上ふおち。又を
ゆつて斬ぐどく。両段ふあうて命をおくとせーあのもあくとやん。
旅客幸ふして男ふ差るーとかくうね。果して伊兵衛が力ハ関う
ちの無銘ふして。乱やくくうれば。爰ふおいて山あれー様故を
ちう。彼刀側よりくくをくうあげえれば。ぐわ紫銅の膳瓶
ふて戦ーやるやん又恋くとばれ。鍋のぐくふくうう。抜ハかく
のぐれ佩刀ふてくくうむとびーやるん。甲斐ーれくもるく。盗賊一人
ぐもおくあざうしと。衛様されふあのもいで。仁顔をあくふ浄水を
清くる。石盤の水香んと。水面ふうつる新あえれば。色ハ瓢の枯ぐるう

ぐ。唐ハめのちの花を含るゐ。かゝる処へ。そぐも伊之清をつれ来りし邑老ども。めゝさの土人。ゆれ旅人ゐハ横生ゐふやと。庭ゐるうんごとゐふのゝと。行ゐゐめらゝ来るめれバ。うんぐと土のひゝらゝ捨〳〵来るもの。又ハ祭ゐるゞぐく。かひゐる子の泣もかゝるつど。人ゐりけて来るもの。傍ゐうゆれ〳〵の浪ゆれの五花磯蚯蚓ちゐの二弟ハ。ねゐうゆのぐんぢゐるゞぐく。立ゐぐとゐ〳〵ハ。中ゐもゐ〳〵ゆゐるゞ。旅人ゐゆ〳〵薬師ゐてもゆむうハ。ゐ打ゐてゆ〳〵ひゆゐとゐゆれバ。側ゐう旅人ども賊の同類ゐゐんとゐひ〳〵ども。たゐハゐぐ。ゐつく残らと戦ゐゐ方ゐるゐ。ぐゆゐられ旅人ゐも縄りけんとゐしゐうゐど。間話夏口ゐふゐ〳〵ゐう。伊之清衛水吞。ゐゐゐふとゐひいぐ。ゐるゐても彼女ハいづくの者

やゐんと。四十ゐゐの男ゐ問ゐれバ。ゐとこ答ていふハ疫前殺れゐハ妹ゐて。ゐ尺ゐけゐ山賊のいざゐひ〳〵ハ於花とゐふ妹ゐゐと少ゐゐ伊之清ふゐ〳〵びゐどゐゐ山賊とゐひ〳〵ゆのハ昨日竝森観音ゐて我ゐ芒鞋をゐて行ゐ〳〵し男ゐ〳〵ん又忙〳〵花子を連て立退〳〵ハゐつ〳〵の面体の男ゐてハゐれやとゐハ。されバとゐその男ハ雲舞の半六とて悪視ゐるゞ。兼て花子をゆ〳〵ひ。ゐゞ妻ゐゐゐんとゐ伪ゐて。いゐゐる花街ゐもゐいゐし。金を切て高妓ゐゐゐんとゐゆと。ゐふゆく妙ゐゐゐゐゞとゐゐゐゆゐゐゆん。むゞゐしく切殺〳〵今朝ゐれてゐれバ。行腕ゐ落され地蔵堂の様の上ゐのりて。ゐゐ〳〵のゐゐ刀ゐても拾ゐしゆ〳〵五本の指ゐぐ〳〵ゐゐゐしゐゞ物語ゐふ。又側ゐゐ〳〵ゐも里の子とゐゞ〳〵。十五ゐゐる小女ゐゐハ。於花女郎ハ

いつくの悪提ゐ捕われ。浦泊の土妓ゐもうりたされのひつくん。日頃ゐなじへゆさーく。此さゼー御もそれくくの日これゐさるへくと流うくもるん。鄙びくる言ぞのうちゐ。実あうて歎とそえれ。侍ち清席と丁度うつて。今ぞ知る草とう仁王のかくくゐ。虎むしむさび。花子姫妹ゐてあうくるる。いづくいくる人とうで。助んとゐくくるも。そうれざる紅糸のうとを変うんと。うくくと涙かくゐ。バ里人ぐつゐ。さてゐ彼花子と相知うのゐ古ゐて作うひーやと。一ゐの替と出ー。これ和田山の草堂ゐかうくるれべ。せあてのくくとも見るしゐへと流ーる。伊ち清飲びつくうあげ見とむ。李の花のごれ唐紙つれ。さのゐ孫ゐ停ゐゆくくひーこれ見へあう。花子ゐ銀釵ゐ肉つれー髪の毛。うくれてあうくるゐ。枕くく半六ゐ

毒ゐゐ。ゐうくいつ。いくーゐかけんとゐすーるとれ。髪も乱れつくんとい。ゐ見えるごく彼ゐくゐ。ゐ種とゐうくう。このの四十ばうくうの男伊ち清ゐ。むくくゐ。都ごくのさる御舘ゐ勤仕ゐてあうくる刻彼ゐ花ゐ父芦部兵蔵といふものと。ゐうくべて住居ゐしけるゐへ。彼妹妹の弟の上ゐ仔細知うくる。彼ゐ花ゐ父兵蔵といふ者ゐ虫一ゐ殺さごる生質ゐて。佩刀急抜目貫小柄まで。南無仏の文字と用るゆえ。時の人異名ーて。念仏兵蔵といひーゐ。かるとれゐいくくてゐ。仏善薩のちくくゐもうくびごくれや。妹ゐ狂賊ゐ殺され。妹いくるる。苦やうゐ人。南無仏の文字つきくる佩刀親うかくくと出日ひきて。彼家ゐあうくしゐ。今塵一ゐうくれい。前夜半六ゐ盗くくひめるん。と。流くくと泣うくち伊ち清ゐ恕糸ゐくくえで。御ゐゐとうくるー。くくん。

花子いうる村里ゐさあうひ。土妓傀儡とあつと旅客ゐ錦帯ゐ
るをとも。ゑゐゐ侍らげるゐ。再びさゐ出さんめをと。五三日ゐ
如ふゐゐうゐ。口ゐをゐし。常の如ちゐひれゐうて。ゐつ長老ゐ別
つげ。姉の妻ゐ骸とめつゐ葬う。香花のゐ人ゐ頂ゐゐめゐ寺侍ゐ
それゐゐ布施をゐゐん。ゐゐと出ゐゐんと酒肉いゐゐる石碑ゐゐう
ゐい。ゐゐんどの須ゐ立ゐつ。構門の額ゐゐれゐ音信山とゐけ
足風孫の道もゐとうゐれゐ夫木集ゐ
時ゐゐゐゐね来ゐれゐゐゐ音ゐれゐゐのゐひゐゐう
夫ゐ車ゐれど花子と景ゐんゐ音信山のゐとゐれを少でやゐゐ
んとゐゐ誓ひ旅宿ゐゐう。脅柳脚半などをゐゐと行装とと
とのゐ。ゐちゐゐゐ稲毛の神と伏ゐゐ。それゐうして杖ゐゐのゐと

ぞゐせゐると誠ー。千種の浦をゐとゐゐゐし。舟ゐゐゐゐれゐ。
風ゐゐゐしと。水主楫取重石をひれあげ。催馬乗ゐゐね揮ゐゐゐ。
旅のゐさをゐゐれ。蕭颯ゐる風ゐゐゐゐ。ゐ網町といゐ所ゐゐける。
此下伊去侍武蔵の岡ゐゐのひれ。於澤といゐ媿婦のゐとへ接脚坪
とゐうゐゐゐびゐれゐゐゐひ。ゐ伏と偽うて去ーとゐと。十余
年のゐち種ゐのゐゐゐゐゐ。ゐゐゐゐゐれゐ詳ゐ是ゐ説と。
下回ゐ花方ゐ次郎といゐ處士のゐゐゐゐゐ。推量知ゐ
ゐそ山一巻と桟語ゐゐし二巻をさて一回とと。此巻ゐゐゐ
二巻ゐゐ。別ゐゐゐゐれ物語とゐひゐゐ首尾詳ゐ知るべー

霜夜星一巻畢